

2009～2018 年

# 東商戦 10 連覇の歩み

～記念祝勝会資料～



平成 30 年 5 月 31 日

如水会館スターホール

## ご挨拶

四神会々長 太田文雄

4月29日、戸田オリンピックボートコースで開催された第70回一橋大学 vs 東京大学対校競漕大会・対校エイトにおいて本学は圧倒的力を見せて勝利。平成21年の第61回大会から続く連勝記録を伸ばし、東商戦史上初の10連覇を達成しました。

この快挙は何よりも歴代の学生（漕手・マネージャー）、そして指導陣のたゆまぬ努力の賜物です。また、四神会をはじめとして、大学関係者や如水会など多くの方の支援が実を結んだものでもあります。

この10年を振り返ると、連覇した選手たちの中からオリンピックが誕生し、今また「東京五輪2020日本代表」の有力候補が羽ばたいています。一橋ボートの長い歴史にあって特筆すべき10年と言えます。

まずは東商戦10連覇の喜びを皆で分かち合うとともに、これをステップに最大目標のインカレ制覇に向けて力を結集していきたいと思います。これからも皆様の力強い応援を端艇部に賜りますようお願いいたします。

### 10連覇の軌跡

		優勝校	タイム	艇差
第61回	H21. 4. 26	一橋大学	5分58秒45	大差
第62回	H22. 4. 25	一橋大学	6分16秒68	1/4L
第63回	H23. 4. 24	一橋大学	6分41秒93	3L
第64回	H24. 4. 28	一橋大学	6分45秒88	4L1/2
第65回	H25. 4. 28	一橋大学	5分53秒45	大差
第66回	H26. 4. 27	一橋大学	6分10秒08	大差
第67回	H27. 5. 10	一橋大学	5分47秒18	4L
第68回	H28. 5. 01	一橋大学	6分25秒57	1L1/2
第69回	H29. 4. 30	一橋大学	6分28秒39	1L
第70回	H30. 4. 29	一橋大学	6分20秒57	1L1/2

\*10連覇の記録を形にして残しておきたいと考え冊子をつくりました。寄稿頂いた皆さん、有難うございました。時間がない中での作業でしたので、間違いや行き届かない点があるかもしれません。ご容赦ください。

# V1 第61回 (平成21年)

10連覇はここから始まった。優勝タイムは5分58秒、東商戦史上初めての5分台を記録。大差の勝利だった。

## 主将・加藤雄気さんの回顧

東商戦10連覇の始まりの61回大会は、「革命」のスローガンの下、弱小から脱却すべく冬場に猛烈な練習を行った成果を示す晴れ舞台であった。終わってみれば東商戦初の6分切り、大差での勝利となった



が、レース前はナーバスだったのを記憶している。一橋の実力優位は明らかだったが、過去数年の東商戦での連敗で負け癖がついていたのだ。「勝ち癖」「FAなど大舞台での経験」は一朝一夕で身につくものではなく、これが私達の代の8+がインカレFAで4位に終わり涙を流した理由の一つとを感じる。

東商戦連覇やインカレでの安定した好成績により、今や一橋は強豪校としての地位を確固とし、下級生のうちから大舞台で勝ちレースを経験していく「流れ」が出来ていることは素晴らしい。現役諸君は10年前の私より明確なVisionを持って日本一を狙えていると思う。大切なのは日本一になる自分達とその道筋を具体的にイメージすること。あと何秒足りないのか？何を補って何秒縮めるか？

強豪校としての誇りと自信を胸に、毎年一度しかない夏で日本一を狙って下さい。

	氏名	学部	学年
C	土川修一郎	商	4
S	中野 紘志	商	3
7	岡本 恭介	経	4
6	片野 恵介	社	4
5	加藤 雄気	商	4
4	季武 慶樹	商	2
3	桂 有理雄	法	4
2	平山 友喜	法	4
B	山田 真	経	3
平均 : 174cm 71.4kg			



## COX・土川修一郎さんの回顧

商東戦10連覇、おめでとうございます。2009年度HUBC副将、対校エイト玄武コックスを務めた土川です。

シンガポール駐在中にて、祝勝会出席叶わず申し訳御座いません。

2009年の商東戦は珍しく順風で、タイムは5分58秒、艇差は大差、スタートで一気に離し、自分達に集中したレースだった。当時のクルーはトップスピードと漕ぎは悪くなかったものの、1000mあたりで漕ぎが緩み始めてしまう点が課題で、悪い内容ではなかったが、そこが潰しきれなかった点を反省し、レース後はインカレまでにどう改善していくかを考えていた。前年までインカレも商東戦も負け続киだったので、マネージャーやOBの皆様に少し恩返しできた点は嬉しかったが、「革命」というスローガンと「インカレ優勝」を目標に掲げた以上、商東戦は最低限勝つべき通過点という気持ちだったと記憶している(東大漕艇部を軽んじているわけではありません)。

現役の皆さんも似たような心境と思いますが、インカレまでに潰せる課題は多くないと思いますので、確りと現実を見つめてインカレに向かって欲しいと思っております。夏の吉報を期待しております。

## V2 第62回 (平成22年)

スタートで1艇身ほど出たものの、終始、水のあかない厳しいレース。1/4艇身差の勝利だった。主将は6年後にリオデジャネイロ五輪に出場することになる中野紘志君だった。



	氏名	学部	学年
C	岩崎 瑤平	経	3
S	中野 紘志	商	4
7	目賀田晃一	法	4
6	岡本 竜太	経	3
5	細川 義和	商	3
4	永田 武	商	2
3	清水 太郎	経	3
2	季武 慶樹	商	3
B	山田 真	経	4
平均		: 175.5cm	71.9kg

### 主将・中野紘志さんの回顧

「最も緊張したレースは何か？」と聞かれれば、最後のインカレでもオリンピックでもなく、大学4年時の東商戦だと答える。ボートに負けてもいいレースはないだろうが、その中でも東商戦は最高に「負けてはならない」レースであり、かつ自分自身、主将としての責任を感じていたこともあり、非常に緊張したことを覚えている。だからこそ、東商戦に臨む全てのボート部員を尊敬するし、そして勝った感動を噛みしめているその顔を見るのは、何年経っても嬉しい。

今思えば、そうした東商戦の中で感じた「最高に負けてはならない」という重圧を、インカレ決勝でも感じるべきだった。どこか「負けても良い」「ここまで来れば十分」と思いがあったに違いない。オリンピックでもそうだ。東商戦の時のあの重圧感、「1ミリも負けることを許されない」という気持ち、それをどんな大会でも、どんなレースでも感じられることが、最高の選手生活の証明のように思う。緊張感こそが一生の財産であり、打ち込んだ証拠であり、そうした緊張感を全ての選手に与えてくれる東商戦は本当に素晴らしい。現役部員の後輩たちが、東商戦以上の緊張感を、次のインカレや全日本でも得られることを切に祈る。私もあの時の緊張感以上のものを感じるために、スロベニアへボートを漕ぎに行く。東京五輪で、最も重圧と緊張を感じられている選手になれば、これほど楽しい現役生活はない。



期待と重圧、それが東商戦の全てであり、それを胸にこれからを生きていってほしいと思う。

### COX・岩崎瑤平さんの回顧

第62、63回大会のコックスを務めました、岩崎瑤平です。東商戦対校エイト10連覇おめでとうございます。

第62回大会のレースはスタート500mで1艇身ほどリードするも、その後艇差を広げることが出来ず僅差で辛勝。ゴールした瞬間は勝利できたことに安堵したが、レース後のMTGで「もっと攻めろ」と野村HCに厳しく怒られたことをいまでもよく覚えている。あの言葉がなかったら翌年の63回大会で対校エイト圧勝を含む全勝優勝を成し遂げることはできなかったと思う。

東商戦のJrエイトでコックスになってから10年間、縁あってボート競技の第一線でコックスを続けている。もし東商戦で負けていたら、まったく別の人生になっていたことと思う。一緒に戦った仲間へ感謝だ。

10連覇の歴史の中で、卒業後もボートを続ける選手がほぼ毎年輩出されているのは嬉しいことだ。これからもHUBCから日本ボート界を盛り上げる人間が多数出ることを願っている。

## V3 第 63 回 (平成 23 年)

3月の東日本大震災と福島第一原発事故によって東商戦も開催が危ぶまれた。鬼頭伸太郎監督は東商戦パンフレットの中で「無事この日を迎えることができ嬉しく思います。部員は、危機的状況の中でほぼ通常通り合宿・練習を続けられたことを誇りに思ってください。それも、多くの四神会の先輩方の協力あってこそです。私は一橋大学ボート部の底力を再確認いたしました。」と述べています。

この年は、オープン種目も含め完全優勝だった。

	氏名	学部	学年
C	岩崎 瑤平	経	4
S	岡本 竜太	経	4
7	笠谷 勇希	商	4
6	永田 武	商	3
5	井上 潤也	商	3
4	季武 慶樹	商	4
3	細川 義和	商	4
2	黒田 哲也	経	4
B	皆川 昇法	商	4
平均 : 179.3cm 75.8kg			



### 主将・笠谷勇希さんの回顧

「呑気にボートなんか漕いでいる場合じゃないだろ」学生生活の多く

の時間と情熱をボートに捧げることを運命づけられた我らが一橋大学端艇部において、まさかこのような言葉が発せられたということは多くの方にとって信じがたいだろう。

2011年3月11日。当時はまさに新人勧誘とシーズン開幕に向けて部が一丸となっていた時だった。そんな時に起こった東日本大震災は、ボートの試合ができるかどうかという次元を超えて日本全体が今後の行く末を心配していた時期だった。親から実家に帰るように言われた部員もいたため、希望すればしばらく部を離れてもいいという方針を取った。それでも多くのメンバーが合宿を続けてくれたことは大変有難かった。間近に控えたお花見レガッタはもちろん、東商戦も開催が危ぶまれた。しかし、東商戦を中止にするわけにはいかなかった。私にとって、対校種目で勝利をおさめることができる最後の舞台なのだから。

前年、対校シングルスカルで出場した私は敗北した。対戦相手は明治大学時代にシングルスカルでインカレ3位となり、その後に東大大学院へ進学した伊藤選手。当時の両校の戦力に鑑みると、対校エイトのメンバーとして東大に勝つのは容易いことであり、むしろ伊藤選手に勝つことの方が遥かに困難であった。自分より強い相手にこそ、戦いを挑みたい。コーチに嘆願し、対校エイトの選考から外れて(協調性の無さから外され)、シングルスカルでトレーニングを積んだ私は、呆気無く敗れた。

その一年後、様々な関係者の尽力により無事に開催できた第63回東商戦。一橋は東大よりも圧倒的に強いチームとして大会当日を迎えた。結果は全勝優勝。しかし、目標としていた大会新記録のタイムは出せず、東商戦では最後まで目標が達成できなかった。

# V4 第64回 (平成24年)

この年の対校エイトには2年生が3人いた。10年間のメンバー表を見ると、どの年も、2年生が乗っていても1人だけである。そして4艇身半の勝利、翌年、翌々年の好成績につながった。



	氏名	学部	学年
C	森 健太	商	3
S	永田 武	商	4
7	藤田 陸	商	2
6	中村 澄人	社	2
5	井上 潤也	商	4
4	金子 裕介	商	3
3	平木 漠	社	2
2	柴崎 智也	社	4
B	山田 周	経	4
平均 : 177.9cm 73.5kg			

## 主将・永田武さんの回顧

2012年の商東戦、私が当時の商東戦を振り返って思い出すのは、「感謝」と「焦り」だ。

まず、感謝だが、私の代の対校エイトクルーは、半分以上が当時の2～3年生で構成される若いクルーだった。当然ながら技術は未熟だったが、整調である私の後ろから勢い良く支えてくれたレースを今でも覚えており、後輩達のお陰で2012年の商東戦では勝利することができたと思っている。

焦りについては、このままで夏のインカレで優勝することが出来るのか、という焦りだ。商東戦では勝利できたもののタイムやレース内容は満足の出来るものではなく、レース後

に非常に焦りを感じたことを覚えている。

現役部員の皆さん、改めておめでとう。ただ、商東戦で勝利しても、そのままではインカレで優勝することが出来ないことはこの10年間が証明しています。インカレまでの数か月で皆さん更に成長し、インカレで悲願を達成してくれることを期待しています。

## COX・森健太さんの回顧

スタートの精度が練習時からあまり高くなかったため、スタートで並んでもコンスタントでしっかり勝負しようというプランだった。コンスタントのスピードには自信があったので、落ち着いてレースに臨んだ。想定よりスタートがうまく決まり、500m付近では勝利を確信した。逆に気が緩んだのか、コンスタントの伸びを欠き、消化不良のレースだったというイメージが残っている。野村ヘッドコーチから厳しい叱咤を貰ったのを覚えている。



# V5 第65回 (平成25年)

年々力をつけ注目を集める中、5分53秒45の好タイムで東大を圧倒。  
 インカレでも日大に1艇身差に迫る準優勝、“一橋強し”を強く印象づけた年だった。私立大学に伍して闘えるという勇気を国公立大に与えた。



	氏名	学部	学年
C	森 健太	商	4
S	鎌田 宜隆	商	3
7	金子 裕介	商	4
6	平木 漠	社	3
5	中村 澄人	社	3
4	藤田 陸	商	3
3	保田 洋祐	商	3
2	小池 基瑛	経	4
B	清水 進	法	4
平均 : 178.8cm 73.9kg			

## 主将・金子裕介さんの回顧

東商戦には、何とも表現し難い独特の緊張感があったように思う。4年生時の東商戦は、勝利そのものについては自信を越えて、確信めいた感覚を持っていた。一方で、連覇のバトンを後輩に繋がないといけない、今年こそは夏に結果を出したいといった感情から生じるプレッシャーに苛まれ、漕手として、主将としての悩みがあったことも、また事実だ。

そのような中、支えになったのはクルーの存在だった。何でも話し合える同期、生意気だけど頼れる3年生、勢いのある2年生

に囲まれ、(実力はさておき)一橋史上最も楽しいクルーだったという自負はある。最終的にインカレ・全日本での優勝は達成できず、未練は今でも残っているものの、(個人的には)良いシーズンだったと言えるのも、クルーのおかげだ。

最後に偉そうなことを言うようですが、現役の皆さんには、一生涯誇れるクルー、チームであり続けて頂きたいと思います。その先に、更なる連覇、そして日本一が待っているのではないのでしょうか。

## COX・森健太さんの回顧

2013年。一生忘れることの出来ぬシーズンの幕開けが、商東戦だった。当時のクルーは、ほとんどが前年のインカレでFinal Aを経験しており、あの舞台で結果を残すこと、日大に勝つことの難しさを知っていた。それゆえ冬場から、「インカレ決勝で日大に勝ち日本一になるには、どうすればいいのか」を明確に目指せていた。

手応えのある冬場を経て、待ちに待ったシーズンの幕開け。2000mでどんなタイムが出るのか、どんな漕ぎができるのか、すごく楽しみだった。私にとって商東戦とは、プライドのぶつけあい。苦しい冬場の成果を、成長を、夏に向けての希望を、期待を、どれだけ見せつけることができるか。そして、「今年の一橋は、強い」と、両校だけでなく、戸田中に感じさせることができるチャンスだと思っていた。

幾千の諸先輩方が積み上げてきた伝統の一部に名前を刻むことのできる喜びを感じ、一橋の誇りをかけて懸命に戦ったあのレースは、今でも私の宝物だ。

# V6 第66回 (平成26年)

前年につづき東商戦は大差の勝利だった。

この年は、軽量級選手権で昭和58年以来の優勝を飾った。インカレは予選で日大を破ったものの、決勝で涙をのんで2年連続の準優勝。全日本選手権では3位と健闘した。ヘンレー・ロイヤル・レガッタに出場し、初戦で米・コーネル大に勝利したことは特筆される。



## 主将・保田洋祐さんの回顧

私は4年次、商東戦対校エイトの3番に乗っていた。当時のエイトはそれなりに艇速も出ており、6連覇に向け死角なしといったような雰囲気当日を迎えた。

当日は競艇場内の500mは風が巻いておりやや波の立つラフコンディション。500m以降はやや横風はあるが微順のコースコンディションだった。経験豊富な上級生中心でのクルーだったが、商東戦はやはり魔物がいるのか。スタート直後、横風を受け艇が立ち上がらず、250mで一艇身程度の差をつけられてしまった。何とか追いつこうと必死にパドルし、その後の展開はあまり記憶にない。いつの間にか差をつけゴールしていた。勝利できたものの、商東戦の難しさを感じたレースでもあった。

10連覇というのは、世代の垣根を越えて継続的に成長してきた証だと思います。おめでとうございます。

余談ですが、先日私の姉(ボート部とは一切関係がない)が結婚したのですが、そのお相手は東大ボート部の方でした。私の東大との(腐れ)縁は一生続いていくようです。

	氏名	学部	学年
C	中尾信太郎	商	4
S	平木 漠	社	4
7	中村 澄人	社	4
6	鎌田 宜隆	商	4
5	平井 駿一	商	3
4	長野 光佑	商	3
3	保田 洋祐	商	4
2	藤田 陸	商	4
B	梶原 隆誠	社	3
平均 : 177.4cm 71.6kg			

## COX・中尾信太郎さんの回顧

2014年の対校エイトはU23日本代表に選出された3名を始めとして、実力あるメンバーが揃っていた。皆、負けず嫌いな性格だったため相互の対抗意識が強く、水上では常に張り詰めた緊張感が漂っていた。この年は冬から春にかけて怪我人が多く、お花見レガッタ出漕を回避した。そのため対外試合としては商東戦がシーズン最初のレースとなり、クルーの仕上がりに若干の不安があった。練習ではコンスタントは力強く漕げていたが、スタートの立ち上げにはムラがあり、商東戦までに修正できていなかった。

レース当日は、0~500m間を春風が吹き荒れており波の高いバッドコンディションだったこともあってスタートに失敗し東大に先行された。しかし、500m以降は持ち前のコンスタントの力強さを発揮し東大を逆転すると、そのままリードを広げる展開。最後の250mはラストスパートが綺麗に決まり、まるで艇に翼が生え、水上を飛んでいるかのようなスピードが出ていた。

6連覇を達成したと同時に、来たるシーズンでの躍進を予感させるレースとなった。

# V7 第67回 (平成27年)

5分47秒18、東商戦史上最速タイムでの圧勝。  
更に、軽量級2年連続優勝、インカレ3位と好成績を残した年だった。



## COX・柴山翔さんの回顧

風が非常に強く、漕ぎが乱れる心配もあったが、自分たちの得意なスタートスパートを決めることができた。また、自分達の理想のレース展開であるスタートから東大を引き離すというのも成功し、200m 過ぎで既に東大が視界から消えた。2Qも勝負所としていた700mの攻撃も決め、艇速を伸ばすことができた。

しかし、苦手な3Qで失速、4Qで取り戻そうとするも1400mの2枚上げが空回りし乱れてしまう。その後すぐに立て直しラストスパートはしっかりと決めることができた。順風ということもあり過去最速タイムも出すことに成功したが、決して満足いく出来ではなかった。

この勝利は単なる7連覇目の勝利ではなく、100点の出来でなくてもここまでスピードが出るという自信、また、自分たちの弱点、強みと言ったものが明確に出たレースであり、軽量級優勝に繋がる勝利となった。

対校艇白虎号に華やかなデビュー戦を飾らせることもできた。



## 主将・平井駿一さんの回顧

「必ず勝つ」それが商東戦への思いであった。本音を言えば「勝たなければならない」という使命を感じていたように記憶している。

練習は十分に積んできたのだから全力を出せばよい、きっと勝てる。それで負けたなら仕方ない、その時はまた考え直そう。これがインカレや全日本へ挑むときの気持ちだった。

「勝たなければならない」と「全力を出し切る」は全く違う心持ちだ。私にとって難しいのは言うまでもなく前者。全力を出そうが勝てなければ意味がない、それは相当なプレッシャーだった。そんな意味で商東戦は特別な戦いであった。

商東戦は結果が重要かプロセスが重要かということをも身を持って経験させてくれていたのかもしれない。もちろん当時はこのレースが人生においてどうだなど考えてもいなかったが、他大学の選手から聞いた対校戦についての心持ちは「お遊びだよ」といった感じ。(無論、早慶戦はかなりの気合いの入りようだ。) 商東戦は素晴らしい経験だ。他大学では得られない特別な経験。一橋大学端艇部は人を育ててくれる場所だ。

	氏名	学部	学年
C	柴山 翔	商	4
S	長野 光佑	商	4
7	梶原 隆誠	社	4
6	荒川 龍太	法	3
5	平井 駿一	商	4
4	岡村 倫行	商	4
3	関口 瞭	商	4
2	佐々木 悠	商	4
B	吉田 至孝	社	3
平均 : 176.9cm 69.4kg			

## V8 第68回 (平成28年)

荒川主将がリオ五輪最終予選に向けた日本代表ヨーロッパ遠征のため不在。不安材料を抱えて迎えたレースでは、スタートで出られじりじり引き離されたが、東大が1000m手前から落ち始めたところで勝負を仕掛け、1艇身差をひっくり返した。



	氏名	学部	学年
C	小林 建介	法	4
S	室本 亮太	社	4
7	伊藤 正都	法	4
6	権田 卓也	社	3
5	矢作 公宏	経	3
4	今村 樹	経	4
3	小野 佑哉	社	4
2	神田 拓也	経	4
B	吉田 至孝	社	4
平均 : 173.3cm 71.8kg			

### 副将・吉田至孝さんの回顧

私が入部した時代の商東戦では東大は敵ではなく、皆が「大会記録の更新」や「プラン通りのレース展開」を目指し、商東戦で勝つこと自体を目的には臨んでいなかったと感じる。しかし、2016年は戦力的にも陰りが見え始め、さらに荒川主将が日本代表でチームを離れて、戦力が整っていたこれまでの取組を繰返してよいのかという不安を持っていた。

オフに漕ぎの質やトレーニング方法など、新たなことに取組んだが、前哨戦のお花見レガッタで、近年最強メンバーの東大に1シート差で敗れる事態となった。新しい取組の中で個々人に「自分を変えること」が求められ、変化への対応の中でチームの統一感を保つことに苦慮した結果だったと思っている。レースが切迫する中で、現状を変えるためにクルーで繰返し議論し、シート配置の検討や、漕ぎのイメージの共有を徹底的に行った。コックスを中心に相手のレース戦略の分析もした。

レース本番は1000mでの1艇身の差から終盤に逆転し、水をあけてゴールするという展開だった。最後までこの一戦に勝つためだけにできることをやり尽くした結果の逆転勝ちだった。この商東戦を通して、負ける姿が見えた時にその現実はどう立向うかということ非常に学んだと思っている。現役の皆さんにも、ボートを通して未来を自分たちの手で変えていく経験を是非してもらいたいと思う。

### 主将・荒川龍太さんの回顧

商東戦10連覇という偉業を達成されたこと、私自身がその連覇に関わっていることを非常にうれしく思っている。

私は商東戦の行われている頃、日本代表として海外で活動しており出場は叶わなかった。現役最後の商東戦に出場できないことを悔しく思うと同時に、今のクルーなら必ずや勝利してくれるだろうという信頼を持っていた。しかし、商東戦の当日は結果が気になりそわそわし、朝の練習後すぐに勝利の速報を受け安堵したことを記憶している。

社会人チームで競技を続ける中で、『勝つ』ためには勝敗や対戦相手などを思考から排除し、自クルーの実力を出すことに集中することが肝要だと感じている。商東戦は、これが非常に難しいレースだと思う。後輩の皆さんには商東戦を通して、自らをコントロールする力を身に付けて欲しいと思う。

後輩の皆さんの商東戦の更なる連覇、またインカレ全日本での目標達成を祈念している。

# V9 第69回 (平成29年)

8連勝は過去に東大が1回記録していた。9連覇は東商戦史上初であった。選手たちには周囲が想像できない重圧がかかっていた。それを撥ね退けての勝利。彼らは連勝のバトンをつないだ。更に重くなったプレッシャーとともに・・・

この年は、オープン種目を含め完全優勝だった。

	氏名	学部	学年
C	石崎 一夫	経	4
S	権田 卓也	社	4
7	矢作 公宏	経	4
6	岩元 優典	商	3
5	山瀬 貴太	経	4
4	伊豫田 航	経	3
3	田村 航	商	3
2	佐々木幹太	法	3
B	久富 一史	社	2
平均 : 176.4cm 72.4kg			



## 主将・矢作公宏さんの回顧

勝って当然。負けないだろう。勝てば史上初の9連覇。こうした言葉全てが、当時の私や同期にはプレッシャーとなっていた。自分の代で連勝を途切れさせてはいけない。こうした気持ちで臨んだ東商戦は正直楽しみではなく、不安や緊張の多いレースであった。「勝って当たり前」というプレッシャーをチームで撥ね退けるために、私は主将として自らの緊張を見せず、緊張している部員には声をかけた。同期は皆重いものを背負っている表情であった。

対校エイトで勝った瞬間に生じた感情は安堵。結果として全種目で勝利し、大会史上初の9連覇となった。



一方、東商戦で勝っただけでは喜んではいけない雰囲気もあり、夏に向けて今一度気を引き締めるきっかけにもなった。端艇部という伝統は私に重くのしかかっていたが、4年間を通して沢山のひとと出会えたこと、特に東商戦で先輩方の想いを感じることができたのは、今となっては良い思い出である。

## COX・石崎一夫さんの回顧

前回大会同様に前半から東大が飛ばしてくると予想していたが、予想に反してスタート直後から終始東大に対して出続けるというレース展開で、無事に9連覇を達成することができた。

ただレース内容としては課題も多く、満足できるものではなかった。中でも一番の課題は攻めのレースをできなかったことだ。クルーとしての完成度が自分達の満足できるレベルに達しておらず、中盤以降の漕ぎにやや不安が残る状態でレースに臨んでしまい、結果として相手の動きを見て仕掛ける消極的なレースをしてしまった。

粗削りなクルーで東商戦に臨むにあたって、チームの最大の目標である「インカレ・全日本制覇」のために東商戦で積極的なレース展開を経験して成長していく必要がある一方で、確実に連勝記録を繋げる必要があるという従来にはなかった矛盾に苦心した分、勝利に安堵するとともに悔しさや難しさを感じた大会だった。

## V10 第70回 (平成30年)

10連覇がかかったレースは思わぬところに敵がいた。スタートから快調に飛ばし500mで水をあげ、1500mでは13秒の大差をつけていた。しかし、大量発生していた藻がラダーに絡みつき失速、ストロークサイドに大きく曲がってしまった。懸命に立て直そうとするが舵がきかず、一瞬ひやりとしたものの1艇身半差でゴール。トラブルに見舞われながら勝ち切り、見事に10連覇を達成した。

	氏名	学部	学年
C	浅沼 遼平	経	4
S	増田 創史	商	3
7	久富 一史	社	3
6	佐々木幹太	法	3
5	田村 航	商	4
4	岩元 優典	商	4
3	須藤 裕人	法	4
2	森 勇人	法	3
B	清倉 龍真	経	2



### 主将・佐々木幹太さん

第132代端艇部主将を務めております、4年H組法学部の佐々木幹太と申します。この場をお借りしまして、東商戦の振り返りをさせていただきます。

今回の東商戦は一橋の10連覇がかかった一戦でした。周りの皆様の期待も大きく、部員は例年以上に緊張感を持っていましたが、それよりも更に大きなわくわく感を持って東商戦に臨めたと思っています。なぜならば、冬場の厳しい練習を乗り越え、各部員が成長を実感していたためです。

対校エイトのレースは、ラダーに水草が絡まるというアクシデントがあった中で、1500mまでに13秒もの差をつけていたため勝ち切ることができました。今年は「速い」という手ごたえを確実に感じています。夏のインカレに向けてより一層の努力を続けて参りますので、これからもご支援・ご声援をよろしくお願い致します。

### 代表幹事・金澤晃太郎さん

本年度、端艇部代表幹事を務めます4年H組の金澤晃太郎と申します。この度は東商戦10連覇を達成することができ、大変喜ばしく思います。

第70回東商戦を実施するにあたり、最も懸念されたのは水草の影響です。この問題に際し、東商戦幹事の瀬戸はもちろん、四神会の皆様や学連といった多くの人々の支えによって東商戦が成り立っているということを強く実感しました。一方でそれだけの方々の支えがありながら結果的にレースに大きな影響が残ってしまったことは自身の力不足を痛感するばかりです。

今回の勝利を夏の躍進への起爆剤に、選手・マネージャー一丸となって努力して参りますので一層のご支援・ご声援をよろしくお願い致します。

# 10 連覇に寄せて

ジョナサン・ルイス (Jonathan Lewis) 端艇部長 \*平成 30 年 4 月就任

## SEVEN THINGS I LEARNED FROM THE TODAI-HITOTSUBASHI REGATTA 2018

First of all, massive congratulations to everyone who played a part in the tremendous results on 29 April, and indeed to all who have contributed to the victories over the past ten years. Here are seven things I learned at the regatta.

1. Hitotsubashi oarsmen keep rowing into their eighties, which is amazing.
2. The junior eight was smoooooooooth (to my admittedly untrained eye). Things are looking good for the next couple of years.
3. Sitting in the VIP seats next to the University President is great but you have to stare past the body of the cheerleader who is jumping up and down between you and the big TV screen showing the races; #awkward.
4. Nomura-san is a phenomenally inspirational coach.
5. The professionalism and attention to detail behind the organization of the regatta was truly impressive. Someone even thought to put a Post-it on the winners' certificates showing how to pronounce the 'Todai and Hitotsubashi Presidents' names.
6. Hitotsubashi's oarswomen deserve a proper race. If Todai can't get its act together to recruit women then we need to come up with a new challenge for our girls.
7. I've got away with not knowing the Hitotsubashi university song for fifteen years, but now I'm just going to have to learn the damn thing.

My son is now ten years old, which means that he has never known a world in which Hitotsubashi loses to Todai. Surrounded as we are by so much instability and uncertainty, let's keep that one thing the same, at least until he becomes an adult!



林大樹 前端艇部長 (平成 53 年卒) \*平成 15 年度から 29 年度まで端艇部長

商東戦 10 連勝スタートの年。前年まで対校エイトで 3 連敗していた一橋は 2009 年全ての対校種目で勝利し、東大を圧倒した勢いに乗って 8 月のインカレに臨んだ。その年のインカレでは一橋の赤いオールが戸田コースを席卷した。男子 8 種目全てで準決勝に進出し、M2+ が銅メダルを獲得。M8+ と M2- が 4 位入賞。その他の種目もほとんどが入賞した。女子も 2 種目で入賞した。その勢いは 9 月の全日本、10 月の全日本新人でも続いた。

翌年からの商東戦の連勝と全国レベルの大会での好成績は、一橋ボートに単なるラッキーではない構造的な変化が生まれていることを証明している。漕手とマネジャーの目標意識、艇庫・体育館・合宿所などの練習環境、監督・コーチ陣の支援体制への若手 OB・OG の参加、四神会の皆さんの物心両面の協力等々が新しいシステムを支えていると思う。そして、このシステムを回すエネルギーは一橋ボートのより高い目標への強い思いに違いない。

## 清水慶太 監督 (平成 20 年卒) \*連覇最初の年・平成 21 年から 2 年間 HC、29 年監督就任

毎年メンバーが入れ替わる大学スポーツにおける対校戦での勝利は約束されたものではなく、選手・マネージャーの努力や思いが図らずも引き継がれたことによる一つの結実です。部員が夢中に活動できるよう、日々ご支援いただいている皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

とはいえエイト 10 連覇は、ゴールではなく通過点にすぎません。インカレや全日本に連覇をかけて臨んでいる大学生が同じ水域で練習し、また、箱根駅伝の連覇やまたはオリンピックの連覇をかけて戦う大学生が日本にいる。まだまだ我々の目の前には目指すべき高みがあります。

HUBC は、過去の伝統を引き継ぐための存在ではなく、毎年新たに参加するメンバーが、個々の思いを胸に夢を目指し、自ら考えて挑戦し、成長できる場です。しかも他のメンバーの個性を「おもろい」と尊重して、受け入れながら。目の前に目指せるものがある以上、我々は止まれないのではないのでしょうか。少なくともまだまだ挑み続けます。これからもよろしくお願いいたします！

## 野村雅彦ヘッドコーチ \*平成 21 年アドバイザー就任、23 年から HC

「5 連覇でいいから・・・」。卒業生でもない私に声をかけていただき、感激と覚悟を示すために「10 連覇をして見せますよ！」と威勢よく宣言した際の小形チームドクターの言葉です。お陰で肩の力が抜けつつも、5 連覇は本当にしないと緊張したものです。

競技未経験者を本格的に指導するのは初めてで、最初はどうなることかと思いました。一橋大学の諸君は適応力や上昇志向、隸属ではない検証力と思考力が備わっていたためか、想定を超え U23・日本代表を輩出し、本場欧州やアジアでの大会参加と驚きの 10 年でした。国内でも経験者を集めた私立全盛の時代に、軽量級優勝をはじめインカレ準優勝、全日本でもその存在感をアピールするまでになりました。本当に素晴らしい学生たちです。

しかし、まだ全日本・インカレを獲ったわけではありません。東大への借りも返せていません。まだ道半ば！これからです！！『不可能の反対は挑戦！！』あるのみ！！

## 季武慶樹 監督補佐 (平成 24 年卒) \*61,62,63 回大会の対校エイト、29 年監督補佐就任

私の現役時代を思い返して、今でも記憶が鮮明なレースが二つある。一つは 2 年生の新人戦、もう一つは 4 年生の東商戦。ただ、後者は自分のレースではなく、Op MIX で出漕した同期の酒井君のレースである。当時私は対校 8+ の選手だったが、レースに向けてまさに岸を蹴ったその時に彼はゴールしてきた。彼はレースで勝利した訳だが、船台付近から見た彼の気迫のこもった漕ぎ、鬼気迫る後ろ姿は今でも脳裏に焼き付いている。そんな彼の姿を見て「対校 8+ の自分たちが恥ずかしい試合をするわけにはいかない、絶対レースで勝つ」と私自身思ったし、きっと他の多くの対校 8+ クルーもそう思ったはずだ。結局、彼の勢いに乗った一橋は続くレース全てで勝利し、全勝優勝を果たした。

彼自身の記録は Op MIX の勝利だが、彼がチームに与えた影響は計り知れないと私は今でも思っている。今シーズンも酒井君の様な部員が一人でも多く出てきてくれることを期待しています。

### 小形滋彦チームドクター（平成 52 年卒） \*平成 12 年からチームドクター

「外向きのベクトル」

10 連勝の始まりを告げたエイトの整調は その 7 年後に、リオオリンピック代表になった中野紘志君であった。競技歴 2 年の彼が、同年 7 月、U 2 3 の M 4 - で、高校時代から日本代表だったエリート選手とともに銀メダルを獲得したことは、端艇部に大きな自信を与えた。

「日本代表になって世界と闘う」それまでの端艇部には存在しなかったモチベーションは、強豪大学のトップ選手の記録を意識した日常の練習になったように思う。その後の U 2 3 での 3 人の代表選出と入賞、ヘンレーでの勝利、アジア選手権での日本唯一のメダル獲得などの海外での活躍は、個人の抜群の運動能力からではなく、チームとして高いレベルを目指した日常の厳しい練習の積み重ねから生まれたものと確信している。10 連勝の間、一橋大学端艇部は、強豪私学と対等に戦い、海外でも勝利した。対校戦勝者に恥じない成績を残してきたことを誇りたい。

### 鈴木崇司 前総監督（昭和 36 年卒） \*平成 21 年から 29 年まで総監督

平成 21 年開催の第 61 回大会に端を発する東商戦 10 連覇達成の立役者が、野村雅彦端艇部ヘッドコーチ(HC)であることに異論を唱える方はおられないと思います。私自身、総監督として、昨年までの 9 年間、野村 HC と緊密な連携を保って参りましたが、この間、氏が私事に優先し、専ら部のため、ローイングのために精魂込めて取り組んでこられたことは、私のみならず多くの皆様がお認めになられる通りです。部のスローガンとした「常強一橋」の要たる指導体制の心髄に立ち、部員の心に火を灯し続けて来たこと、常強の原点たる部員獲得に強い関心を示し、部の勢力を堅持し続けてくれていることは、正に特筆すべきことと思われまふ。氏の指導を受け実社会に巣立った何人かの後輩たちが、引き続き真剣にローイングに取り組んでいることを見ても分かる通り、このことは正に氏の指導がただものでないことの証であります。

今期より、監督陣が若返り、監督には平成 20 年卒の清水慶太君、監督補佐には 24 年卒の季武慶樹君が就任し、野村 HC を加えた新たなるトライアングル体制がスタートし、見事念願の対東大 10 連覇を達成してくれました。この結果に満足することなく、宿敵東大に借りを返すため、少なくともあと 15 連勝し、戦績をタイにして貰いたいと思っております。

この 10 年を振り返った時、それなりの戦績を収めて参りましたが、四神会を初め大勢の皆様の暖かいご支援ご声援があったればこそと痛感しております。改めて御礼を申し上げます。

### 畠山雄三郎 前四神会会長（昭和 47 年卒） \*平成 23 年から 29 年まで四神会会長

「WHAT CHOICE?」

祝東商戦 10 連覇！選手・マネージャー・指導陣の皆様のご健闘、OB のご支援に感謝します。「東商戦は勝つか負けるかの一騎打ちである。それは過去の栄光など全く関係ない勝負である。」「現役である僕らにとって重要なのは、勝ってきたか負けてきたかではなく、勝つか負けるかだ。」第 6 4 回大会の一橋・永田主将と第 7 0 回大会の東大・阪本主将の言葉である。選手諸君は只々純粋に戦いたいと思っている。

映画「スターウォーズ」のパムロ議員とジンの会話：「What chance do we have?」「The question is 'What choice?」圧倒的に強い帝国軍に対し「What Choice?」、即ち「戦うか戦わないかよ！」という訳である。これからも戦いが続く。アスリートの純粋な気持ちで挑戦して欲しい。

# 10年の記録 対校フォアも10連覇達成

## 対校フォア

	優勝校	タイム	艇差
第61回	一橋大学	6分48秒82	5L1/3
第62回	一橋大学	7分18秒82	3L
第63回	一橋大学	7分38秒40	3L1/2
第64回	一橋大学	7分39秒20	5L
第65回	一橋大学	6分57秒20	2L
第66回	一橋大学	7分11秒47	2L
第67回	一橋大学	6分50秒62	1L1/2
第68回	一橋大学	7分11秒93	4L
第69回	一橋大学	7分17秒00	2L
第70回	一橋大学	7分06秒57	5L

## 対校シングルスカル

	優勝校	タイム	艇差
第61回	一橋大学	7分44秒40	大差
第62回	東京大学	7分53秒14	5L
第63回	一橋大学	8分10秒99	不明
第64回	東京大学	8分20秒94	大差
第65回	東京大学	7分42秒61	3L
第66回	東京大学	7分53秒64	4L
第67回	東京大学	7分42秒16	大差
第68回	東京大学	8分20秒27	3L
第69回	一橋大学	7分51秒02	5L
第70回	一橋大学	8分04秒94	大差

## ジュニアエイト

	優勝校	タイム	艇差
第61回	一橋大学	6分20秒69	2/3L
第62回	東京大学	7分02秒88	2L1/2
第63回	一橋大学	6分51秒23	カンパス
第64回	一橋大学	7分12秒76	2L
第65回	一橋大学	6分08秒16	大差
第66回	一橋大学	6分16秒47	1L1/3
第67回	一橋大学	6分16秒28	2L1/2
第68回	一橋大学	6分32秒35	3L
第69回	一橋大学	6分37秒17	1L(*)
第70回	一橋大学	6分31秒13	5L

(\*)オープン男子エイトとして開催

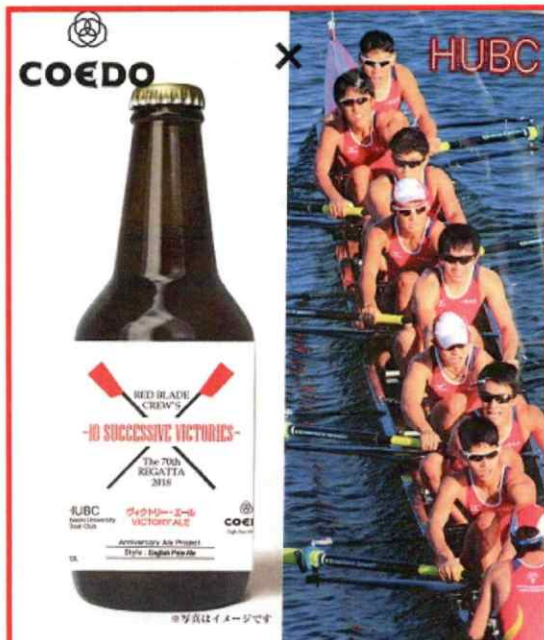
## 女子対校クオドルプル

	優勝校	タイム	艇差
第61回	一橋大学	7分37秒71	2L2/3
第62回	一橋大学	8分17秒25	大差
第63回	一橋大学	8分07秒67	大差
第64回	一橋大学	8分11秒54	大差
第65回	一橋大学	7分28秒90	大差
第66回	一橋大学	7分48秒68	大差(*)
第67回	一橋大学	7分42秒16	不戦勝
第68回	一橋大学	8分19秒45	不戦勝

## 女子対校ダブルスカル

第69回	一橋大学	8分19秒45	不戦勝
------	------	---------	-----

(\*)東大は他大学混成クルーで出場



2018年4月29日、一橋大学船艇部(HUBC)は、東海戦史上初の10連覇を達成しました。そんな心躍る10連覇の感動を共有したいという思いから、COEDOビールと共同で10連覇記念ビールを作ります。その名も、VICTORY ALE。ビールで東海戦10連覇をお祝いしませんか。

**感動を、共に。**

川越市のクラフトビール・COEDO BREWERY とのコラボで10連覇を祝して記念ビールをつくりました。

味わいからラベルまで全てカスタムメイド、レッドブレードのための特別なビールです。ボート競技発祥の地、英国スタイルのペールエールです。しっかりとしたモルトのコクとカラメルの香ばしい香りが特徴です。

このビールで10連覇の感動をもう一度・・・。

ご注文等のお問い合わせは

マネージャー 瀬戸琴子(商学部3年)まで

[huc.10successive.victory@gmail.com](mailto:huc.10successive.victory@gmail.com)

戸田艇庫 048-441-4057

編集責任：太田文雄

写真提供：辰巳 順